第五講　心情・理由説明

一

問1　次の文章は『更級日記』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。

今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知りはて、親の物へ率て参りなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、今はひとへに豊かなる勢ひになりて、ふたばの人をも、思ふさまにかしづきおほしたて、わが身も※三倉の山につみ余るばかりにて、後の世までのことをも思はむと思ひはげみて、霜月の二十余日、※石山に参る。

注　三倉の山につみ余る…ここでは「倉に山となるほどの財力を蓄える」くらいの意。
　　石山…近江国にある石山寺。

問　傍線部「もどかしく」とあるが、なぜそのように感じるのか。その説明として最も適切なものを次の中から選べ。

ア　子供を物詣に連れていっていないことを、申し訳なく思っているから。
イ　生活が豊かになったのに神仏をおろそかにしたことを、後悔しているから。
ウ　以前は神仏をかえりみなかったことを、恐ろしいことだと考えているから。
エ　物詣に行こうと思いつつなかなか行動にうつせないことを、反省しているから。
オ　親が物詣に連れていってくれなかったことを、ひどいことだと思っているから。

問2　次の文章は、石上の中納言が燕(つばめ)の子安貝を取ろうと計画したところ、家に使われている男たちが、「燕は建物の棟の柱の穴ごとに巣を作るので、そこに足場を高く組んで忠実な男に取らせたらよい」と進言し、中納言がその通りにした場面である。この文章を読んで、あとの問に答えよ。

殿より、使ひまなく賜はせて、「子安の貝取りたるか」と問はせたまふ。燕も、人のあまたのぼりゐたるに怖ぢて巣にものぼり来ず。かかる由の返りごとを申したれば、聞きたまひて、「いかがすべき」と思しわづらふに、かの寮の官人くらつまろと申す翁申すやう、…

問　傍線部「思しわづらふ」とあるが、どのようなことを受けてのことか。最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　燕の子安貝を取ろうとして、人を高い足場にのぼらせようとしたが、人々が高いところを怖がって子安貝が取れないという報告

イ　燕の子安貝を取ろうとして、燕を捕まえ腹を見てみたところ、子安貝らしきものはあったが見たとたん消えてしまったという報告

ウ　燕の子安貝を取ろうとして、大勢の人を現場につかわしたのだが、それらの人たちがまったくやる気がないという報告

エ　燕の子安貝を取ろうとして、大勢の人が足場にのぼっているのだが、それを燕が怖がって巣にあがってこないという報告

オ　燕の子安貝を取ろうとして、大勢の人を足場にのぼらせたが、巣にいる燕が怖がって巣で子供を産まなくなったという報告

問３　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

つつしみて、虚言したまふまじきなり。〈中略〉ただし、例へば、狩人の鹿を追ひうしなひて、「これより鹿や行きつる」と問はんに、あの草の中にありとは知れども、「知らず」といはんは、虚言にあるべからず。仏、許したまふなり。すべてかやうなる虚言は、咎(とが)になるべからず。このほかの虚言は、よくよくつつしみたまふべし。

問　傍線部「虚言にあるべからず」とあるが、なぜそうだというのか。その理由として考えられる最も適切なものを次の中から一つ選べ。

ア　食料を得ようとしてなす行為は、人間が生きていくためにはどうしても必要な営みであるから。
イ　犯罪行為を目の前にして、自らを守るためどんなことを行っても、緊急避難として許されるから。
ウ　草の中に隠れた鹿を自分でも目視できない場合は、その所在を示さなくても虚偽とはならないから。
エ　殺生の罪をまぬがれるために嘘をつくことがあっても、それは方便として許容される所為であるから。
オ　正直に答えなくても、仏に祈りさえすればどんなことも許されるのが、仏教の有り難い利益であるから。

問４　次の文章を読んで後の設問に答えよ。

昔、（注1）空也（こうや）上人、（注2）山の中におはしけるが、常には、「あなもの騒がしや」とのたまひければ、あまたありける弟子たちも、慎みてぞ侍りける。度々（たびたび）かくありて、ある時、かき消（け）つやうに失せ給ひにけり。〈中略〉

かかるほどに、ある弟子、なすべきことありて、市（いち）に出（い）でて侍りければ、あやしの（注3）薦（こも）引き回したる中に、人ある気色（けしき）して、前にことやうなるものさし出だして、食ひ物の端々（はしばし）受け集めて置きたるありけり。「いかすぢの人ならむ」と、さすがゆかしくて、さし寄りて見たれば、行方なくなしてしわが師にておはしける。

「あなあさまし。『もの騒がしき』とのたまはせし上に、かきくらし給ひてし後は、<u>ふつに世の中にまじらひていまそかるらむとは思はざりつるを</u>」と言ひければ、「もとの住処（すみか）のもの騒がしかりしが、このほどはいみじくのどかにて、思ひしよりも心も澄みまさりてなむ侍るなる。…

1　空也…平安時代の僧。浄土教の先駆者。　2　山…比叡山延暦寺。　3　薦…むしろ。

問　傍線部について。弟子はなぜこのように言ったのか。その理由の説明として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　空也上人が騒がしいことをいつも嫌っていたから。
イ　空也上人がはなはだ貧しい暮らしをしていたから。
ウ　空也上人が静かに仏道修行に打ち込んでいたから。
エ　空也上人が弟子に人々との交際を禁じていたから。
オ　空也上人がもっと遠くに行ったと思っていたから。

問５　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

女の親、少将にあるじすべき方のなかりければ、小舎人童ばかりとどめたりけるに、かたい塩、肴（さかな）にして酒を飲ませて、少将には広き庭に生ひたる菜を摘みて、蒸しものといふものにして、ちやうわんにもりて、はしには梅の花のさかりなるを折りて、その花びらに、いとをかしげなる女の手にて、かく書けり。

君がため衣のすそをぬらしつつ春の野にいでてつめる若菜ぞ

男、これを見るに、いとあはれにおぼえてひき寄せて食ふ。女、わりなうはづかしと思ひてふしたり。少将起きて、小舎人童を走らせて、すなはち車にてまめなるもの、さまざまにもて来たり。

問　傍線部「小舎人童を走らせて、すなはち車にてまめなるもの、さまざまにもて来たり」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から選べ。

ア　女が風流な歌人であることに気づき、御礼をしたくなったから。
イ　女の家が精一杯のもてなしをしてくれて、和歌にも心打たれたから。
ウ　女の家に何もなく、食事にも困って必要な物を取り寄せたから。
エ　女と共に生活するために、自分のこまごました品が必要だったから。
オ　宮中から迎えの人が来たので、参内の衣装などが必要だったから。

問６ 次の文章は、はん噲（かい）と村雲という二人の盗人が道を行く場面である。これを読んで、後の問に答えよ。

（道中で出会った武士が）「（お前たちは）まことに悪徒（わるもの）とこそ見ゆれ。命は塵灰（ちりあくた）にあぶれあるく。乱れたる世にてあらば、豪傑の名とり、国を奪ひて、敵をおそれしめん。いさまし」と云ふ。はん噲云ふ。「ぬす人とても、命は惜しきぞ。財宝は得やすく、命はたもちがたし。百年の寿（いのち）を盗む術（すべ）しりたらば教へよ」とぞ。武士わらふわらふ。「財宝かすめられたらん者のうらみなからんやは。おほやけには、しかる者とらへんとて備へたり。人をも殺し、盗（ぬすみ）あまたして、むくひの命百年と云ふ事あるべからず。…

問 傍線部「武士わらふわらふ」とあるが、武士はなぜ笑ったと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　乱世ならば英雄になりそうな男だから、考えることも並一通りではないと感心したから。
イ　乱世と違い、今は世の中の治安が良くなっているということに男が気づいていないから。
ウ　命になど執着しない悪人中の悪人と思った男が、命は惜しいと凡人のようなことを言ったから。
エ　悪事を働くなら死ぬ覚悟ができているはずなのに、男は捕らえられることを恐れているから。

二

問1　次の文章は、保元の乱に敗れて逃れていた新院（崇徳院）を、家弘・光弘父子が輿に乗せて都でかくまってくれるところを探すが、ことごとく断られた後の場面である。文章を読んで、後の問に答えよ。

家弘父子も、かきも習はざる御輿を、てづからみづからかきたてまつり、ここへかしこへとつかまつりぬれば、力弱りはてて、はたらくべしともおぼえず。合戦には戦ひつかれたり、物の具にはおされたり。身のありさま、我にもあらずおぼえければ、「自害をせばや」と思ふこと度々なりけれども、「さて、院の御ことをば誰かは見とどけまゐらすべき」と思ひければ、よろぼひよろぼひつかまつる。院も合戦の紛れなれば、供御もまゐらずして、昨日も暮れぬ、今夜も明けなむとす。御身も弱らせたまひて、消えいる御ここちのみぞおぼしめされける。

家弘父子…家弘・光弘。桓武平氏。新院に近侍した。

問　傍線部「自害をせばや」とあるが、それを思いとどまった理由は何か答えよ。

問２　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

これも今は昔、白河院の御時、北面のざうしに、うるせき女ありけり。名をば六（ろく）とぞいひける。殿上人ども、もてなし興じけるに、雨うちそほ降りて、つれづれなりける日、ある人、「六よびて、つれづれなぐさめん。」とて、使をやりて、「六よびて来（こ）。」といひけるに、程もなく、「六召して参りて候ふ。」といひければ、…

問　傍線部「六よびて来（こ）」とあるが、「六」はなぜ呼ばれたのか答えよ。

問3　次の文章は、『源氏物語』紅葉賀巻の一節である。源典侍は、年配の内侍で、恋多き女性である。その相手としては、頭中将、源氏の君、以前より関係があったと思われている修理大夫(すりのかみ)などがいる。この場面は、源氏の君が源典侍のところに忍んでいることを、頭中将が知ったことからはじまる。これを読んで、問に答えよ。

頭中将は、この君の、いたうまめだち過ぐして、常に(注1)もどきたまふがねたきを、つれなくて、うちうち忍びたまふ方々多かめるを、いかで見あらはさむとのみ思ひわたるに、これを見つけたる心地いとうれし。かかるをりに、すこしおどしきこえて、御心まどはして、「懲りぬや」と言はむと思ひて、(注2)たゆめきこゆ。

注1　もどく…非難する。
注2　たゆむ…油断させる。

問　傍線部「これを見つけたる心地いとうれし」とあるが、なぜ頭中将はこのような気持ちになったのか、説明せよ。

問４　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

※良峰（よしみね）の宗貞（むねさだ）といふ、六位の蔵人（くらうど）なるが、才学ある者にて、帝のみ心にかなひ、ちかう召しまつはさせ、時々「文（ふみ）よめ」「歌よめ」と、御あはれみかうぶりしかば、いつとなく朝まつり事もみそかに問ひきき給へるとぞ。宗貞さかしくて、まつり事はかたはしばかりも御答へ申さず。ただ、御遊びにつきし事どもを、「しかせしためし」など、み心をとりて申す。

色このむ男にて、花々しき事をなむ好みけるが、年毎（ごと）の※豊（とよ）の明（あ）かりの舞姫の数を、<u>すすめてくはへさせし</u>。「これは、※清見原の天皇の、吉野（よしの）に世を避けたまひしが、み国しらすべきさがにて、天女五人天（あま）くだりて、舞伎（ぶぎ）を、なぐさめ奉りしためしなれば、五人のをとめこそ古き例（ためし）なれ」と申す。同じく色このませしかば、ことしの冬を初めに、宣旨（せんじ）くだりて、花さかせ給へりけり。

良峰の宗貞…八一六～八九〇年。良峰安世（よしみねのやすよ）の子。桓武天皇の孫にあたる。八五〇年に仁明天皇が崩御すると出家して遍昭（へんじょう）と称する。

豊の明かり…豊の明かりの節会（せちえ）。新嘗会または大嘗会に豊楽殿（ぶらくでん）で行う公式の宴会。宴会の後、五節（ごせち）の舞が行われた。平安時代中期までは、五節の舞の舞姫は、公卿の未婚の娘の中から二人、殿上人・国司の未婚の娘の中から二人（大嘗会では三人）が選ばれた。

清見原の天皇…天武天皇（在位六七三～六八六年）。飛鳥浄御原宮（あすかのきよみはらのみや）（現在の奈良県明日香村）を造営した。

問　傍線部について、どのような理由でそうしたのか。問題文に即して説明しなさい。

問5　次の文章は『保元物語』の一節である。保元の乱の戦いで、源氏・平氏はそれぞれ親子や親族間で敵味方（崇徳（すとく）上皇方（がた）と後白河天皇方）に分かれて戦ったが、源為義（ためよし）は、敵対する長男の義朝（よしとも）や平清盛らに敗れ、比叡山（ひえいざん）に逃れて出家し、身を隠していた。そこに為義に従って戦った六人の子供たち（八男の為朝（ためとも）ほか、四・五・六・七・九男）が訪ねてきた。為朝は為義に関東に逃げるよう説得したが、為義は「降参して義朝に助命を乞い、息子たちの助命を頼む」と言い、それぞれに逃げるように伝えた後の場面である。よく読んで、後の問に答えよ。

入道、泣く泣く宣（のたま）ひけるは、「今度の合戦の大将軍を承りしも、我が身は老の末なれば、たとひ思ひ出でありとても、何（いか）ばかりの栄花（えいぐわ）をか期（ご）すべき。ただ、子供の行く末を思ひつる故なり。また、只今（ただいま）、首を延べ、恥を捨て、出でんとするも誰故ぞ。※和殿原（わとのばら）がためぞとよ。されば、いかならむ谷の底、岩木の陰にも身を隠し置きて、入道がならむ様（やう）をこそ聞き終（は）て給はめ。相（あひ）かまへて、一所（いつしよ）へばし落つるなよ。一人二人いかなる事に遇（あ）ふとも、残り留（とど）まる者、などか本意を遂げざらん。この中に、九郎は、未（いま）だ十五か六かにこそなると思ゆれば、弓の本末（もとすゑ）をも知らず、まして、武略の道、前後不覚の者なれば、八郎、これをば相具（あひぐ）して、且（かつう）は我が形見とも見よ、且は子とも思ふべし。されば、はや疾（と）う疾う」と暇（いとま）を乞ひけるが、また涙にむせびて…

注　和殿原…貴殿ら。お前たち。

問　傍線部について、なぜ入道は子供たちにこのように言ったのか、わかりやすく説明せよ。

【第五講】

〔模範解答〕

一

問1　オ　　問2　エ　　問3　エ

問4　ア　　問5　イ　　問6　ウ

二

問1　新院〔＝崇徳院〕のことを見届ける人が誰もいなくなってしまうから。

問2　雨の日に退屈をしのぐことができるほどの気が利く女だったから。

問3　いつも真面目ぶって非難してくる源氏の君が腹立たしく、忍んで通っている多くの女をなんとかして見つけたいとずっと思い続けていたから。

問4　天武天皇が吉野に世を避けた時、国を治める前兆として、天女が五人天からおりてきて、舞を舞ってなぐさめた例があるので、舞姫は五人のほうが良い例にのっとっているから。

問5　全員一緒に逃げると最悪全滅してしまうが、別々に逃げて誰かが生き残れば、その者が本来の目的を果たせると考えているから。

〈現代語訳〉

一

問1 今となっては、昔のたわいのない思いも後悔するのだなあとばかりすっかり思い知り、親が物詣に連れて行って参拝などもしないで終わったことも、ひどいことだと思い出さずにはいられないので、今はいちずに豊かな身の上になって、幼い子供も、思い通りに大切に養育し、私自身も倉に山となるほどの財力を蓄えるくらいで、来世までのことも考えようと思い励んで、十一月の二十日あまりの日に、石山寺に参詣する。

問2 屋敷から、使いをひっきりなしにおやりになって、「子安貝は取ったか」と質問なさる。燕も、人が大勢（足場に）のぼっているので怖がって巣にあがってこない。このようなことの返事を申し上げたところ、聞きなさって、「どのようにすべきか」と思い悩みなさっていると、その寮の官人くらつまろと申す翁が申し上げるには、…

問3 慎んで、嘘をつきなさってはいけないのだ。〈中略〉ただし、たとえば、猟師が鹿を追って見失って、「ここを鹿が通り過ぎたか」と聞いてきたなら、あの草の中にいるとは知っているが、「知らない」と言うようなのは、嘘であるはずがない。仏は、許しなさるのだ。総じてこのような嘘は、罪にはなるはずがない。この他の嘘は、よくよく慎みなさるべきだ。

問4 昔、空也上人が、比叡山延暦寺にいらっしゃったが、いつも、「ああ騒がしいなあ」とおっしゃったので、たくさんいた弟子たちも、慎んでいました。たびたびこのようで、ある時、（空也上人は）消えるようにいなくなりなさった。〈中略〉こうしているうちに、ある弟子が、すべきことがあって、市場に出ていましたところ、みすぼらしいむしろを張り巡らしている中に、人がいる様子がして、前に変なものを差し出して、食べ物の切れ端を受け取って集めて置いている人がいた。「どういう人なのだろう」と、そうはいってもやはり心がひかれて、寄って見たところ、行方不明だとしていた我が師匠（＝空也上人）でいらっしゃった。

「ああ驚きあきれることよ。『騒がしい』とおっしゃっていた上に、行方をくらましなさった後は、まったく世の中にまじっていらっしゃるだろうとは思わなかったことよ」と言ったところ、「もとの住処が騒がしかったが、ここはとてものどかで、思ったよりも心もいっそう澄むのでございます。…

問5 女の親が、少将におもてなしをすることができなかったので、（少将が）小舎人童だけを留めていたが、（その小舎人童

には）堅塩を、肴に酒を飲ませて、少将には広い庭に生えている菜を摘んで、蒸し物というものにして、茶碗に盛って、箸には梅の花で盛りである梅の枝を折って、その花びらに、たいそう上手な女の文字で、このように書いた。

君がため…＝あなたのために衣の裾を濡らしながら、春の野に出て摘んだ若菜よ

男が、これを見ると、たいそう心を打たれて引き寄せて食べる。女が、どうしようもなく恥ずかしいと思って横になっていた。少将は起きて、小舎人童を走らせて、（小舎人童は）すぐに車で実用的なものを、いろいろ持って来た。

問6 （道中で出会った武士が）「（お前たちは）本当に悪党に見える。命は塵芥のように思って暴れて歩き回っている。乱世であるならば、豪傑と評判になり、国を奪って、敵を恐れさせただろう。勇ましい」と言う。はん噲が言う。「盗人だといっても、命は惜しいぞ。財宝は得やすいが、命は保ちにくい。百年の寿命を盗む方法を知っているならば教えよ」と（言う）。武士がとても笑う。「財宝を奪われた者の恨みがないだろうか、いや、ある。朝廷は、そのような者を捕えようと準備している。人をも殺し、窃盗をたくさんして、報いの命が百年ということがあるはずがない。…

二

問1 家弘も光弘も、慣れていない御輿を、自身でかつぎ申し上げ、ここへあちらへとお連れ申し上げたので、すっかり力が弱り、動けるとも思えない。合戦には戦い疲れ、武具には（体が）押された。身の有様は、茫然自失だったので、「自害をしたい」と思うことが何度もあったが、「そうして、院の御事を誰が見届け申し上げるのか、いや、誰も見届け申し上げられない」と思ったので、よろよろお仕えする。院も合戦の紛れなので、お食事も召し上がらず、昨日も暮れて、今夜も明けようとする。（新院の）お体も弱りなさって、消え入る御心地だけを思いなさった。

問2 これも今となっては昔のことだが、白河院の御代に、北面の武士の詰め所に、気が利く女がいた。名前を六と言った。殿上人たちが、もてなして興じていたが、雨がしとしとと降って、退屈だった日、ある人が、「六を呼んで、退屈をしのごう。」と言って、使いをやって、「六を呼んで来い。」と言ったところ、間もなく、「六を召し連れて参りました。」と言ったので、…

問3 頭中将は、この源氏の君が、たいそう真面目ぶっていて、常に非難なさるのが腹立たしいので、（源氏の君が）平然と、

こっそりお忍びになるところが多いようなので、なんとかして明らかにしようとばかり思い続けていたところ、これ〔＝源氏の君が源典侍のところに忍んでいること〕を見つけた気持ちはとても嬉しい。このような時に、少し脅し申し上げて、御心を惑わして、「懲りたか」と言おうと思って、油断させ申し上げる。

問４　良峰の宗貞と言う、六位の蔵人であるが、学識がある者で、帝の御心にかない、近くに絶えず付き添わせなさり、時々「漢詩を詠め」「和歌を詠め」と、ご寵愛をうけていたので、いつとはなく政治に関してもこっそりお尋ねなさったとかいうことだ。宗貞は賢くて、政治に関しては少しばかりもお返事を申し上げない。ただ、詩歌管弦の遊びに関したことを、「そうした例（がございます）」など、御心にかなうように申し上げる。

色好みの男で、華々しいことを好んだが、毎年の豊の明かりの節会の舞姫の数を、勧めて加えさせた。「これは、天武天皇が、吉野に世を避けなさったが、御国を治めなさる前兆として、天女が五人天からおりてきて、舞を舞って、おなぐさめ申し上げた例があるので、五人の舞姫が古い良い例にのっとっているのである」と申し上げる。（帝も）同じく色好みでいらっしゃったので、その年の冬を初めとして、宣旨がくだって、華やかにしなさった。

問５　入道〔＝為義〕が、泣く泣くおっしゃったことには、「今度の合戦の大将軍をお受けしたのも、我が身は年老いているので、たとえ思い出があったとしても、どれくらいの栄達を期待できるか、いや、できない。ただ、子供たちの将来を思ったからである。また、ただ今、首を延べて、恥を捨て、降参しようとするのも誰のためか。お前たちのためだよ。そうなので、どのような谷の底、岩木の陰に身を隠し置いて、私がなる有様を聞き届けなさるがよい。決して、同じ所へ逃げるなよ。一人や二人どのような事に遭って（死んで）も、生き残った者が、どうして本来の目的を果たせないだろうか、いや、果たせる。この中で、九郎は、まだ十五、六になると思われるので、弓の上下もわからず、まして、武略の道は、まったくわからない者なので、八郎〔＝為朝〕よ、これ〔＝九郎〕を一緒に連れて、一方で私の形見とも思って見ろ、一方では子供だと思うのがよい。そういうことで、早く早く（逃げろ）」と別れを告げたが、また涙にむせんで…